

■(ルポ)五木代表から落選議員まで11人に訊く

## 希望の党に 希望はあるか？

「カリスマ」も、わずかな言葉のミスでその玉座からあつという間に転げ落ちてしまった。

小池百合子代表の下、希望の党は衆院選では二三五人を擁立するも、五〇議席獲得にとどまった。さらに昨年十一月十二日に行われた葛飾区議会選挙でも都民ファーストの会(以下、都フア)公認の候補者五名の

うち当選したのは一名。四カ月前の都議選の勢いが、まったく消えたかに見えた。

「わくわくしている。爽やかにスポーツテイーにいきたいと思うので、皆さん頑張りましょう」

十一月十四日、小池氏からバトンを受け継いだ、四十八歳の玉木雄一郎新代表は笑顔で語っていた。

ジャーナリスト

## 岩崎大輔

いわさきだいすけ

1973年静岡県生まれ。講談社「FRIDAY」記者。政治、スポーツ、漫画など幅広く取材。著書に「ダークサイド・オブ・小泉純一郎」「激闘 リングの覇者を目指して」など。

若き新代表が率いるのは、平均年齢四十九・四歳と最も若い政党である。しかし、船出は順風満帆とはいかなかった。世論調査で政党支持率は極度に低迷したまま。安保関連法や憲法九条改正をめぐる党内は一枚岩には程遠い。所属議員の六割は民進党出身者で、何がどう変わったのか、まるで見えてこない。

果たして、希望の党に希望はあるのか……。この問いをもって、まずは落選者を訪ねた。

### 落選者たちのホンネ

木内孝胤氏は、チャーター(結党)メンバーとして三期目の当選を目指すも、落選の憂き目にあった。結党大会当日の九月二十七日、記者会見に向かうその直前に、小池氏から「伸見ね、頑張ってるね」と、国替えを告げられた。言葉を補えば、木内氏の地盤であった東京九区を捨て、自民党の石原伸晃元幹事長の地盤である東京八区から出馬せよ、ということだ。その一週間前、小池氏側近の若狭勝氏から国替えの打診があったが、落選中も含め二期九年間、練馬区で培った人脈を断ち切るのは断腸の思いだった。

「小池さんが出馬を決断する、という感触があった。その際、選挙区は石原さんのいる杉並で、私は途中で練馬に戻す、というシナリオなのかと推測していた。いくつかの選択肢の中で、バズルのような調整要員になればいいと覚悟を決めました」

木内氏は候補者六名中、三位。「負けた人間の言い訳ですが」と前置きし、こう続ける。

「現職を優先する」「強い方に譲る」と野党間には暗黙のルールがあるのに、自民党の石原さんに対して、五人の野党候補者が挑んだ。候補者調整や選挙協力を持ちかけられても、希望の党が強気に押し切ってしまった。強気一辺倒のその姿勢が立憲民進党(以下、立民)の結党ももたらしてしまった」

かつての仲間同士が争った。一例を挙げれば、東京一六区では、元民

主党の田村謙治氏(希望の党)と初鹿明博氏(立民)が争った。田村氏は静岡四区で三期当選の実績があったが、自ら活動拠点を東京に移し、惨敗した。東京二二区では連合唯一の組織内候補の山花郁夫氏(立民)にも対抗馬を当て、連合の全面的支援を得ることもなくなった。

緑色の洋服で緑色のスカーフを巻いて現れたのは佐々木里加氏だ(東京一九区、落選)。小池氏との2ショットポスターの撮影代として三万円かかることを知らず、撮影直前にコンビニのATMへ慌てて向かった候補者だ。

佐々木氏は芸術家で女流画家協会の代表。小池氏が塾長の「希望の塾」や若狭勝氏が塾長の「輝照塾」の一期生で、玉木氏との直接の面識はなかった。

「玉木新代表とは十一月三十日、落

選者を四〇名ほど集めた会で初めてお話をした。『皆さんが希望の党の財産です』と切り出され、紙を読むこともなく自身の言葉で話された。新代表は『スピード感を持って』とよく言う。この言葉は小池先生の言葉なので、私の中で希望は消えていない」

希望の党の内部は三つに大別される。佐々木氏のような「塾生」とチャーターメンバーと民進党出身者だ。出馬に際して、民進党出身者は党から供託金（小選挙区三〇〇万円、比例選六〇〇万円、重複立候補者は比例分が三〇〇万円に減額され、計六〇〇万円）も選挙資金も出資されている。しかし、チャーターメンバーや塾生は供託金や党運営費（現職二〇〇万円、新人一〇〇万円）、選挙資金を自腹で賄った。

戸時代の分権型から中央集権型に変えたということ。我々が目指しているのは分権型で、地域が自立した国のあり方だ。国会議員と地方議員は横で手を結ぶ。国政選挙と地域政党が共存し、国政選挙の時は連携するような緩やかなネットワークを構築していく形を模索したい。

——大阪維新の会（以下、維新）や都府アといった地域政党の流れは、希望の党の考えに合致しているのか？

地域政党が出てきた背景にあるのは中央集権の歪みが限界にきたこと、中央政党が地域の不満を吸い上げているということだ。

自民党は経済でもマクロの数字ばかりで、圧倒的多数の中小零細企業の経済状況とはかけ離れている。

地域の課題に取り組みような地方議員の動きをサポートしていきたい。国政政党の我々は外交、社会保障な

保証人となり金融機関から八億一〇〇〇万円を借り、候補者全員に供託金を返してくれるそうで信頼が増しました。当面はそれを政治活動に充てたい。けれども、十二月半ばの現在、支部調整の目途は立っていない。明日にも駅前演説に立ちたいのですが」

以下、玉木新代表をトリに据え、当選組の国会議員を中心に大惨敗を喫した原因、野党共闘の行方、党を立て直し策についてインタビューをした。

### 論点1 党の理念

古川元久 幹事長

愛知二区、当選八回

一人ひとりが創業者、経営者

ど国としてやっていかなければならないことに特化すべきだ。

——党勢拡大を図っていくうえで、落選者の処遇をどうしていくつもりか？

お金をもらえるならやります、という人では、ただの社員だ。一人ひとりがベンチャー起業家だという意識でないと困る。そういう自覚も覚悟もある人に対してはできる限りのサポートをしたいと思っている。看板頼みの人ばかりでは自民党を凌駕する党には絶対になれない。

——希望の党のコアとなるものは何か？

戦う集団を作っていくためには、政党文化を作っていく必要がある。民進党時代はバラバラだと言われたが、その反省がある。みんなが創業者であり、みんなが経営者だという自覚と責任を持ってほしい。

——幹事長としてどうやって党勢拡大を図っていくのか？

全部ゼロから作らないといけない。うちの党は世襲の議員は少なく、ベンチャー起業家が集まった感じだ。借金もたくさんあるが、自民党に代わる政権を担える政党を作るという大きな志もある。これをいいチャンスとして新しい政党文化を作りたい。

欧米の二大政党というのは元々二つの大きな政党があつてそれぞれ成長してきたが、それと同じイメージでやったことで無理が生じた。アメリカの企業を見てもグーグルやマイクロソフトなど新しい企業が現れているが、ゼネラル・モーターズ（GM）やゼネラル・エレクトロニクス（GE）とは企業文化や組織形態が全然違う。

二〇一八年は明治維新から一五〇年に当たるが、明治維新の本質は江

井出庸生

政策調査会長代理

長野二区、当選三回

地方やマイノリティーの声を

——民進党では代表選への出馬も模索していた。

あの時はこんなに早く解散になるとは思わなかった。しかし、年末にかけて離業者が出て新しい政党ができるだろうし、いざれ解散総選挙となればその動きも加速する。そういう危機感があった。私は民進党結党に参画して二年弱だったので、あの時はまだやれることがあるのではと思って手をあげた。だが、仮に私が代表になつていたらとしても、離党の流れが止まらなければ現実的に何ができたかというとなかなか難しいと思う。党がなくなってしまうという危機感をみんな感じてないので気づいてほしいという思いがあった。

——民進党のまま選挙に突入してい  
たら埋没していたと思うか？

それは誰も否定しないんじゃない  
かな。前原誠司さんが解党を決断し  
た時（両院議員総会）に私は比較的  
発言した方だったが、なんでみんな  
発言しないのかなと思った。各党か  
ら当選した元民進党議員と話してい  
ても、あの時点では、あのまま民進  
党でいったら行き詰まるだろうと  
薄々感じていたんだなと思った。

——どういう政党を目指すのか？

右とか左ではなく不安になってい  
る人たちに手を差し伸べ、そして彼  
らから応援してもらえれば政党になっ  
ていけるか。そういう意味で国会論  
戦は非常に大事。私が衆院予算委員  
会を取り上げたLGBT（性的少数  
者）に関しては取り上げるべき課題  
であったと同時に、自民党議員の失  
言に対する追及も質問のきっかけと

いが、見事だったと思う。振り返っ  
てみると歴史的な節目となりうる決  
断だと思ふ。

——野党第二党であることについて  
どう考えているか？

率直に言って維新と政策が似通っ  
ているのだから一緒になればいいと



結党記者会見。長島氏は左端（写真©読売新聞社）

なった。

希望の党の特徴は野党であっても  
保守であり、寛容であるところ。具  
体的には大企業や中央至上主義では  
なく、保守だからこそ地方や少数者  
や困っている人にも目が届くような  
立ち位置を目指していくべきだ。

## 論点2 野党連携

長島昭久 政策調査会長

東京二区、当選六回

### ドイツ型の連立政治の時代へ

——昨年四月に真つ先に民進党を一  
人で離党。チャーターメンバーとし  
て、執行部として、展望をどう見る  
か？

（理想と現実の）一番大きな乖離は、  
チャーターメンバーが、党内を掌握  
しきれていないということだ。明け

思っている。もちろん、連合や民進  
党との関係もあり、慎重にやらなけ  
ればならないだろう。だが、改革保  
守としての親和性は極めて高いと思  
う。私は民進党時代も共産党とやる  
くらいなら維新とやるべきだとずつ  
と言いつつ続いていた。

——どうやって政権交代するのか？

私は二大政党制の幻想を直視すべ  
きだと思っている。民主党が政権を  
取ったところまでは良かったが、下  
野した後は共産党と組んで、とにか  
く安倍晋三政権を倒そうとしている  
ので、まるで議論が噛み合わない。  
こうなると得するのは与党。野党を  
無視すればいいからだ。

私はよく例に出すが、安保法制な  
んであれだけ論争を呼んだにもかか  
わらず一文字も修正されていない。  
あれだけの大事な法案であれば野党  
として修正する必要がある。そうい

透けに言うると、私は当初、チャータ  
ーメンバー一〇人程度が中心となり  
一、二回生が中心の四〇人を加えた  
五〇人くらいが選挙に勝ち抜いて固  
まりとなることを想定していた。そ  
れであれば、党の進むべき方向性は  
基本的なところでの軋轢もなく進ん  
でいった。

しかし、今は党内のガバナンスで  
かなりのエネルギーを割かないとい  
けない状況なので、ベストとは言え  
ない。

——保守二大政党制を志向するのか。

民進党はバラバラだと言われている  
が、右と左に分けることは小池さ  
んの力がなかったとしたらできな  
かつたし、前原さんの勇断も大きか  
つた。批判はあるが、他の人ではでき  
なかつた。僕らは内部から変えるこ  
とができずに党を去ったので、スパ  
ッと綺麗に二つに割れたわけではな

う政党が一つは必要。

——しかし、是々非々の維新も埋没  
の危機にある。

やっぱりある程度の人数、具体的  
に言うとか明党を凌ぐくらいの人  
数が衆参に必要だ。二大政党制を  
求めていくのはもう破綻したと思っ  
ている。ドイツ型の連立政治で、そ  
の時その時のテーマに対して安定し  
た基盤の上で解決していく方法を模  
索していくべきだと思う。政権を担  
える政党が二つか三つあって、そこ  
をいくつかの少数政党が補完してい  
くような形になっていくのではない  
か。寛容な改革保守として独自性を  
打ち出し、存在感を出していく。

——ライフワークである防衛や安全  
保障には小池さんもこだわりを示し  
ていた。

これは本当に私が政党を作って実  
行したいと思っていたこととびつた

り合致していた。私は小池さんと一緒にやることには何の違和感もなかった。私たちも独自の新党を模索していたが、自分たちの力だけでは難しかったので、小池さんがいなければできなかった。五〇人もいれば御の字。これは負け惜しみでも何でもなく、夢見たから失望もあるけれども、政策を譲ってまで人数を膨らませる必要はない。

**小川淳也** 社会保障制度調査委員会  
香川一区、当選五回

総選挙では  
情報公開を争点にすべきだった

—先の衆院選を振り返ってどうか。憲法改正や安保で踏絵を踏ませたのが間違いだった。政策協定では「権力の私物化を許さない」「徹底した情報公開」を論点にすべきだった。森友・加計問題で国民は怒意的な情

報公開に怒り、呆れていた。国民が求めていたのは、安倍政権の「権力の私物化」を止めること。民進党内のベテランやリベラル派を切ることはなかった。国民が野党に何を期待しているか、に立ち返る必要がある。

—国民から求められるもの、とは？

安倍政権に対峙する政治勢力であると鮮明にすること。綱領に書いた「改革保守」を基軸としながらも、やはり穏健な改革保守から中道リベラルまで含めた広い層の声を代弁できないと、国民政党とはなり得ない。安倍政権にすり寄り寄ったり、補完勢力になるのは死滅への道につながる。

—二〇一九年の参院選の勝敗が大きな節目となる。

一人区では野党候補を絶対に一人に絞るべき。共産党も柔軟に思想を

ではこれからも続けていくが、一方で追及の畏にはまっぴいけくない。

—対与党が鮮明でないと、野党として支持を広げていけないのでは？

国会全体においては、政府提出法案の七七八割ほどの党も賛成している。イメージの問題になっている部分があるので、どのように振る舞うかというのが大事。

しかし、マスコミに取り上げられることを意識して質問するというのはどうかと思う。国民の側を向くという意味では、国会で質問して終わりではなく、それをどうやって国民運動につなげていき、支持を広げていくのかということに重きを置くべきだ。これからの国会質問も現地、現場の滞っている課題にしっかりと目を向けて、そこに光とメスを入れていくような視点で行うべきだと思う。

変えている最中で、野党共闘の枠組みに共産党も引き込むべき。与党から見れば、野党の候補者が一本化されることほどいやなことではない。

—維新と連携することになったら？

この党にいらなくなる人も出るだろう。逆に野党連携に舵を切れれば、先発離党組や保守系組に違和感が出てくるかもしれない。根っこは民主・民進党なので解党や離党までは避けたいと思うが。玉木代表は今バランスをとる時期かと思うが、いざこれの矛盾を抱えたまま、走り続けることは難しくなる。参院選や統一地方選から逆算していけば、二〇一八年一月後半から始まる通常国会の会期内には旗幟を鮮明にせざるを得ないのではないか。

—離党は考えているのか？

私はそもそも比例区の議員だし、今後の展望は？

私は参議院民進党の質問を見ていて、非常に親和性を感じたし、依然として連う党とは思えないくらい連帯感を覚えた。できる限り合流していくことで衆参双方にしっかりと議席数を確保できる政党になることを目指す。それを推進していく意味でも民進党との連携を深め、きちんとした与野党交渉になるように当面は立民に対してしっかりと知恵を提供していければと考える。

**今井雅人** 国会対策委員長代理

岐阜四区、当選四回  
報じてもらえないという現実

—分裂や新党を経験してきた今井議員は玉木新体制をどう見るか。

玉木さんが新代表になった直後のに期待感が出ていない。深刻に捉えるべきだ。原因は大きく二つある。

この段階で言えることも、言うべきこともない。しかし、野党内は一強二弱であり、希望も民進も国民の支持を得られていない。何を言っても国会で実行できる力がない。まずその二弱が先に手に手を取りあう以外に生き残る道はない。

### 論点3 対安倍政権

**泉健太** 国会対策委員長

京都三区、当選七回

抵抗だけでは支持は得られない

—国会では追及よりも建設的な議論をしようとしているようだが。

忘れてはいけないのは対国民という視点。国民にどのような情報やメッセージを届けるか、考えなければならぬ。様々な疑惑追及に関して、真相究明や再発防止という視点

玉木代表は永田町では有名だが、全国的な知名度が低いこと。もう一つは、希望の党は結局、小池さんの党だというイメージが強いからだ。

——どうやって党を発展させるか？  
正直言うと難しい。再編しかないのではないか。現実的な問題として、国会で野党第二党というのはとても苦しい。目立たないからだ。みんなの党も維新もそこで沈んでいった。希望の党がしっかり立ち上がるためには、今のままでは難しいだろう。

政策や理念を格好良く言っても、絵に描いた餅にすぎない。僕は冷めた目で見ているので希望の党の他の議員とは捉え方が違うと思う。まずは野党第一党を取る。さらに対決の姿勢を見せなければならぬ。対決しない野党は朽ち果てる。

——しかし、対決していた民進党も支持率は上がらなかった。

#### 論点4 憲法改正

松沢成文 参議院議員団代表

神奈川県知事などを経て  
参議院議員当選一回

憲法九条を逃げずに議論する

——希望の党は、自民党の補完勢力か？

私たちは憲法改正を党是に掲げている。安全保障政策も、現実的な危機を受け止めた上で進めていくべきと考えている。加えてマニフェストで「原発ゼロ」も打ち出している。国内の保守政党で初めて、憲法改正と原発ゼロを同時に掲げた。これこそが独自路線で、なぜ自民党の補完勢力と言われるのかわからない。

——維新との連携を目指す？

今は第三極だが、自民党に代わる政権政党・国民政党にならないとい

なぜ民進党の支持率が上がらずに、立民が高い支持を得ているのか。理由は二つある。一つは統一感で、民進はバラバラだと言われていた。立民はやっていることは同じだけれど、枝野幸男新党としての統一感がある。もう一つは判官贖戻。しかし、これは長続きしない。希望の党も最低限バラバラ感を出してはいけない。

——バラバラ感を解消する方法は？  
うーん、僕は無理にまとめようとしない方がいいと思う。主張が違うのに、無理にまとめようとするとバラバラ感が出てしまう。どこかの段階で割れるのなら割れることも仕方がないのかもしれない。

その一方で、多数派を取らないといけない。これは矛盾した話だから難しい。どちらかを取らないといけないが、僕は多数派を取るしかないと思う。

今の希望の党には武器が少なく、バラバラ感もあり、与党に対する姿勢もわかりづらい。その三重苦があるので、舵取りが難しい。全部を解決するのは困難だから、何を優先すべきかを戦略的に打ち出さないと埋没してしまう。

——これからの戦略については？  
希望の党は今後、どんないいことを言っても報じてもらえないという現実をまずは理解すべき。党勢を拡大する上で、マスコミにどれだけ取り上げられるかは意識せざるを得ない。批判ばかりしない健全な野党を求めていると言われるが、果たしてそうなのか。安倍首相への批判の声は大きいので、対決姿勢を鮮明にしないとわかりにくい。

是々非々なんて国民は求めている。正直、これといった解答は見出せない。

けない。その過程として政策が近い維新との連携も視野に入れるべき。先の総選挙でも東京と大阪で互いに候補者調整も行った。その流れを国会での連携につなげ、将来的には自民党を打ち倒す一つの政党になれるようにすべき。時計の針を戻すような連携はすべきでない。

——みんなの党は五年で消滅し、維新も勢いに驕りが見える。  
小さな野党は絶えずアピールしないと埋没してしまう。橋下徹さん、渡辺喜美さんには発信力があつた。弱小野党では、基盤が弱く、維持するためにリーダーの発言を頼りにしてしまう。

ただ、アピールするため党内で承認されていないことを述べたり、全く反対のことも口にしたりして党内でもめてしまう。リーダーの勝手で過激な発言が火種となり、独裁者

になってしまい、党内はバラバラとなる。玉木さんは論客であるが、常にバラランスも視野に入れている。パフォーマンスだけでは足りないリーダーになってほしい。

——憲法改正は離党、分党などの呼び水にならないか？  
マニフェストを発表する前、小池さんは「憲法九条は安倍政権が仕掛けてくるまで態度を鮮明にすべきではない」との立場だった。知る権利、地方分権、一院制に優先順位をつけようとしていた。私は、憲法改正する上で九条から逃げてはいけない、最大のテーマだからこそ正面から考えましよう、と話した。最大のテーマを逃げずに議論する。今までの民主党、民進党では憲法改正の議論すらできなかった。希望の党にいるなら、このポリシーは吞んでほしい。どうしても吞めないのなら、党を移



るか、新党を作るべき。

## 大串博志 衆議院議員

佐賀二区、当選五回

### 野党間の連携を深める

——共同代表選では、政権打倒を掲げた。

その目的を共有する野党との連携を深める。その際に活発な憲法論議はしても、今の段階で九条改正は不要と考えている。また現実的な外交安全保障を目指すべきだが、集団的自衛権を含む安保法制を容認することはできない。その二つの政策は安倍政権と相対するものであるから、そのスタンスを掲げることが希望の党の希望となる。希望を持つためにも私は党の中で必要と思われる意見はしっかり言っていく。

——憲法調査会の議論では改憲ありきだが。

ている。安倍政権打倒のために小異を捨てて大同につく。その姿を作れることが大事だと思う。今回、自民が勝ったのは、野党がバラバラで票を食い合ってしまったこと。それに尽きる。

——当初の一〇票前後との予想を上回り、一四票集めたが、人事では冷遇されている。

人事は代表が決めることだから。私の考えは玉木さんには伝えている。



共同代表選時の玉木氏（右）と大串氏

即断はできない。党内の憲法調査会、安全保障調査会で議論を深めていくところだ。その中でも議論を注視していきたいと思う。拙速な評価をするつもりはない。

——小池氏へ厳しい発言が多いが。私は小池さん個人を攻撃したことはない。私のスタンス、希望の党はこうあるべし、というものが、小池さんと異なるので、報道を見た方はそう捉えてしまうのかもしれない。玉木氏が共同代表から代表へと決まった時に「唐突感と違和感がある」と発言したのも、小池さんが代表を辞める、と私に伝わってきたのが午後三時過ぎ。両院議員総会が二時間後の五時開始。そこで役員を決め、小池さんが辞任し、新しい代表を決める、という噂を聞いていた。

本来なら、代表が辞めるので、まずそれを受け止める。国会も始まっ

いくらでも協力しますよ、と。結果として、このような状況になっているのは代表の判断なんだと思うが。

——新党結成の考えは？

私は希望の党はこうあるべき、と代表選で述べた。玉木さんにも自分の思いを伝え、受け止めてくださるなら協力はします、とも伝えている。その上で執行部がどう党運営をしていくのか注視していく。それ以上でもそれ以下でもない。

### 新代表インタビュー

#### 玉木雄一郎 新代表

香川二区、当選四回

東京五輪以降を見据えた「未来先取り政党」へ

——維新と連立か、と報じられているが。

ているので速やかに、二、三日後に改めて両院議員総会を開き、共同代表の下で新代表を決める、という流れが正当な手続きになる。現に欠席の議員さんもいる中で、正当な手続きを経ないまま拍手で決めてしまった。

——維新との連携については？

安倍政権を打倒する、その目標の下、共に活動できる政党ではない。——舌の根も乾かぬうちは離党しない、と。

同じ党でも意見の違いは存在する。右から左まで抱えるかもしれない。大事なことは安倍政権と相対する、その目的を共有しながら一定の意見の違いは抑える。意見の違いがあっても、行動する時にはまとまる。わかりやすく言えば大人の対応をする。それができないからバラバラに見えるてしまい、野党への失望感が広がっ

それはない。我々は独自路線で行く。将来のことよりも足元を固める。連立どうこうという状況ではない。もちろん巨大与党に対峙する時に野党の連携は必要になる。野党間でもめても与党を利するだけ。力を結集する方向で頑張っていきたい。

——打倒、安倍政権？

当たり前です。補完勢力にはならない。大平正芳元総理の理念に「権力の哲学」というのがある。権力には二つの中心があるように、政治にも自民党に代わる政党があることで適切な緊張と調和が生まれる。そのために寛容な改革保守政党として勢力を拡大していきたい。ぽっかりと空いている、ど真ん中で支持を広げ中道勢力を包含できるような勢力を作っていきたい。

——希望の党として内政ではどこに力を入れるのか？

プロビジネスを目指したい。民進党時代は、イノベーションや経済成長をしっかりと道筋まで考えていなかった。配分に重きを置き、全体のパイを増やそうという発想が乏しかった。そうは言っても、自民党の新自由主義的な経済政策も取らない大企業、大都会を強くすればそのうちトリクルダウンで普通の人や地方にもお金が回ってくると言っているが、ごく一部の富裕層に富が集まるだけ。

我々は小さなビジネスに目を向けている。中小企業を徹底的に応援する。地方の雇用は中小企業に支えられている。非正規の人を正規雇用にする。赤字企業でも社会保険料を払わなければならない。企業負担分の社会保険料は免除する、と打ち出していく。

また、倒産件数は減ったが、二〇

一六年に休廃業や解散した企業は三万社近くとなり、過去最高。その半数が黒字なのに後継者不足で社をたたんでしまっている。そのまま放置するとGDPが二兆円も減ると言われている。事業継承税制が厳しく自分の代でもう辞めようという人が多いため、思い切った事業継承税を免除する。労働組合の組合員だけでなく、現実に即し、中小企業の経営者も応援する。

——民進でも自民でもない道を歩むのか？

東京五輪後のことを考えていく。二〇二〇年後の未来を先取りして提言・提案を打ち出していく。未来先取り政党でありたい。

成長著しいアジアの都市と地方が直接、やりとりできるようにする。地方の空港、港湾の整備も行う。公共事業は悪、と考えた民主党の発想

でもない。ビジネスが地域で花開くために空港を整備し、LCC（格安航空会社）の便をもっと飛ばせるように規制緩和を行っていく。東京を経由する必要はない。自民党の中央集権型ではなく、地方から文化も企業も花開くように我々は応援してい

く。

財務省時代によく見ていたが、師走に、地方のインフラ整備のためにどれだけの人が新幹線や飛行機で東京に来て霞が関をうろろしていることか。交通費がもったいない。自分たちの地域のことは自分たちで決める。権限や財源を中央から地方に移譲すればいいだけの話だ。

——小池氏とは縁もなく、携帯電話の番号も最近まで知らなかった。

携帯の番号を交換したのは、共同代表選に出てから。勝負師ですよね。「崖から飛び降りる覚悟」で都知事

詰まっている。

選に出た。あれは真似できない。あのチャレンジ精神は受け継ぎたい。都政に専念するとおっしゃっている。そうは言っても首都の首長だから、連携すればいい。地方の知事と小池さんを我々がつなぐ。

——分党や離党の報道があるが。

心配していない。増えることはあっても減ることはない。素晴らしい人が集まっているので、素晴らしい政党になる、と私自身も期待している。愚直にやっっていく。九人の一期生に期待している。長崎一区の西岡秀子さんは小選挙区で当選している。その九人が希望の党の希望だ。地元にしつかり足を運び、地元の人々の声を聞いて、有権者の皆さんに信頼される政治家になる。あんたが何党でも応援するよ、と言ってもらえるようにになる。苦しい時こそ現場、原点に戻る。希望の党に希望はたくさん

玉木氏は二〇二〇年の東京五輪以降の「将来を見据えての政策を打ち出していく」と熱く語るものの、党内には連携をめぐる異論が存在し、分党、離党の危機は拭えない。

二〇一九年七月には参院選が控え、安倍政権は衆参で三分の二を超える議席を有する現体制の間に憲法改正の発議まで狙うこととなる。その際、希望の党はどう動くのか。党の方針に同調できない議員がどう振る舞うのか。玉木氏は高所で綱渡りしながら進み続ける時のような状況にあり、注意を払わねばなるまい。

なお最後に付言しておくが、本ルポと同時に並行で本誌編集部から希望の党全国会議員にアンケート調査への回答を依頼した。ところが、途中で「このアンケートには回答しない

ように」と党本部から議員に対して通達があった模様だ。今、手元にあるいくつかの回答から抜粋して、本稿を終える。

「比例への投票数を見ると多くの方々が反自民への声を持っている。その結果が大きな力になると思う」

(下条みつ・長野二区、当選四回)

「(1) 地方自治、(2) 国民の知る権利を明記すべし、と選挙で公約した。これをベースに憲法論議をすべき」(渡辺周・静岡六区、当選八回)

「ともに政権を担うという立場に立てるなら『政権担当期間中にこれを實現する』という政策目標を共通化して、政権合意を結び、連立政権を組むべき。それならば選挙協力はどうの政党と行ってもかまわない」(柿沢未途・東京一五区、当選四回)